

演目紹介

船弁慶(ふなべんけい)

源義経は平家を滅ぼして大手柄を立てたにもかかわらず、つまらぬ者の講言によって兄頼朝との仲が悪くなってしまった。

頼朝に対して二心ないことを証明するために、いったん西国へ落ち行く決意をし、ある夜密かに弁慶をはじめとするお側去らぬ十余人とともに、淀川を下って、摂津の国大物の浦へとやって来た。

義経は愛妾静をここまで同道していたが、弁慶は時節柄相応しくないから都へ返すように進言し、静にその旨を伝える。静は最初信じようとはせず、自分で直接確認すると言って、御前へ参上する。義経から別れを告げられた静は、「静」という名前は船旅には縁起がよいのにと、神懸けて誓ったことの空しさを嘆き、再会を期する。別れの盃を受け、請われるままに静は門出を祝して男舞を披露し、泣く泣く別れていく静との別れを惜しんでその日は逗留と決めた義経だったが、弁慶は強引に出船を決行する。

穏やかな日和だった海上が、一転かき曇って暴風雨となり、義経に滅ぼされた平家一門の亡霊が波間に姿を現す。なかでも総大将平知盛の怨霊は、義経を海底に沈めてしまおうと、水上に浮かび上がり、長刀を大きく振り回しながら、悪風を吹きかけ、執拗に襲いかかってくる。

義経は少しも騒がず、果敢に相手をするが、現の人を相手にするように戦っても、怨霊ではちががあかない。弁慶は数珠を押し採んで、不動明王をはじめとする五大尊王の力を借りて一心に祈祷を続ける。悪霊が遠ざかった隙に船を岸に近づけると、またもや追いつかり、やがて夜が明けるころ、ようやく怨霊は引き潮に乗って波の彼方に消すのだった。



静の舞、船頭の嵐風の描写、知盛の長刀使いが中心の見せ場だが、勇壮な弁慶、りりしく可愛い義経の魅力も捨てがたい。前半弁慶と静のやりとりがだらだら長い感じがするが、「静」と呼び捨てにする弁慶と、一步も引かない静の緊迫したやりとりが表現されると、面白い場面のはずである。

『義経記』の静御前は、自分では何も決められず、めそめそした弱い愚かな女であるが、この曲の静は、弁慶相手に一步も譲らず、堂々と渡り合う。別れに際しての舞も、陶朱公の故事を引きながら、今は西海に赴くとも、やがて兄弟仲良く共に栄える日があると、精一杯のはなむけの内容であり、健気に別れていく。

